

## 初めての論文

鈴木 悟

私は、昭和63年信州大学医学部を卒業後、現在の糖尿病・内分泌代謝内科の前身である老年科に大学院生として入局した。当時の教授は、山田隆司先生で、学生教育、研究に熱心であった。夕方、6時すぎに一旦帰宅され、8時すぎに、大学に戻られ、必ず12時まで仕事をされる生活を当時退官まで3年を残す時期に毎日されていた。当方は、大学院といっても、ほぼ、他の医局の先生と同じに病棟を持って、現在の3年目研修のような体制であった。

教授を見習ってか、医局の先生方は、みなさん兎に角、平時には、朝から夕方は病院、夕方以降は大学の研究室にいた。患者の具合が悪いと、夜間、研究室と病棟を何度も往復した。

そんななかで、医者になって、初めて受け持った患者さんは、70歳代の女性。主訴は前胸部痛であった。患者さんは、当方、初めての指導医の先生が、外勤先から、解離性大動脈瘤疑いで緊急入院させた方だった。重症をいきなり、現在でいう初期研修医に単独で持たせるという現在ではありえないような状況であったが、入院後、奇異な経過をたどる。前胸部痛は、入院時消失しており、最初に胸部解離性大動脈瘤を疑った胸部レントゲン写真上、確かに大動脈弓部に突出を認めるが、なんかおかしい。胸部CT上、右側大動脈という血管走行変位であった。食道造影、心臓カテーテル検査施行し、診断がつき、患者さんは無事？退院された。

単なる誤診じゃないか……今から振り返ると、いろいろ問題があるかもしれない。しかし、今、医者になって最初の症例が、重症疾患疑いで、最終的に思いもよらぬ診断になったという強烈な印象を受けたことを覚えている。これを症例報告しようと思った。なぜ？と、皆さん聞かれると思う。でも、まわりの先輩が、論文を書いていたからとしか答えられない。

指導医の先生も、「おまえ、右側大動脈を解離性大動脈瘤と誤診した一例、なんてタイトルにするんじゃないだろうーな」と冗談まじりに言っていたが、最後まで、論文を書くことは良いことだと励まし続けてくれた。

書き始めて、ほどなく、あれだけ珍しいと思っていた症例が、よくあるケースであることがわかった。珍しい症例を報告するのが、症例報告だと考えていた私は、書くのをやめようかと思った。先輩のなかには、それもそうだなと同調してくれる人もいたが、指導医は、いつでも、励まし続けてくれた。

そして、一旦書き始めた以上、信州医学雑誌なら載せてくれるだろうという甘い気持ちもあって、書き上げ、投稿した。

案の定、それほど甘くなかった。ほどなく戻ってきた。しかし、リジェクトにはならなかった。査読の先生から、いろいろリクエストがあった。そのうち、当科の先生、他の科の先生、いろいろな皆さんが、当方の論文の日本

語の言い回しから、まとめ方について、いろいろ見てくれた。あの論文が、編集委員会で問題になっているという話を伝え聞いた。査読の先生からのリクエストをクリアして、送り返すと、また、新たなリクエストが来る。そのやり取りは、10回以上に及んだ。かくして、単純な症例報告に終わるはずの論文は、右側大動脈の当時のレビューを含む、1本の論文になっていった(文献)。ある時、この経験した症例の、今までかつて報告のない細かな違いがあることに気づくことができ、感動したのを覚えている。最終の査読の最後の言葉が今でも忘れられない。直筆で、「アクセプトです。今まで、いろいろ注文つけてすみませんでした」と書いてあった。当時、紹介状の返書はすべて直筆だったので、どなたが、査読者かわかった。こちらから、お礼を言いたかったが、査読者はわからないことになっている建前上、ついにお礼を言えなかった。そして、いままで発表した論文のなかで、査読者から謝罪されたのは、これしかない。

これだけ、お世話になったからには、いつかは、信州医学雑誌の査読者になって貢献したい、そして、諦めないでまとめることの意味を伝えたい。症例報告は決して珍しい、初めての報告にあらず。自分たちが、ありふれたと思っただけで、どんなケースだって報告できるはずだ。そう思い続けていたが、あいにく、その巡り合わせはなく、昨年夏より、福島県立医科大学で、子供の甲状腺を診ている。ほとんど、超音波診断に明け暮れる毎日だが、しかしこちらでも、論文を書いている。後輩の論文指導もしている。査読もしている。こうしていられるのも、信州医学雑誌に書いた初めての論文があったからだと思っている。

信州大学の若い先生へ。

信州医学雑誌は、決して論文をリジェクトせず、最後まで、面倒をみってくれる雑誌です。特に、初めて論文を書くひとにはお勧めです。そして、論文がアクセプトされた暁には、是非、後輩の先生の論文の査読をしてあげてください。インパクトファクター？ この次の論文から考えましょう。

末筆ながら、ここに紹介した査読者の方に、25年経った今、お礼を申しあげますとともに、信州医学雑誌をいままで支えてこられた幾多の先生方に深く感謝の意を表します。  
(2014年11月記)

文献：鈴木 悟，市川和夫，橋爪潔志，重松 理，武田貞二，城田俊英，近藤照貴，平松邦英，岩崎 勤，山田隆司 解離性大動脈瘤を疑わせた右側大動脈弓の1例．信州医学雑誌 37, 377-382, 1989

(福島県立医科大学医学部甲状腺内分泌学講座教授)